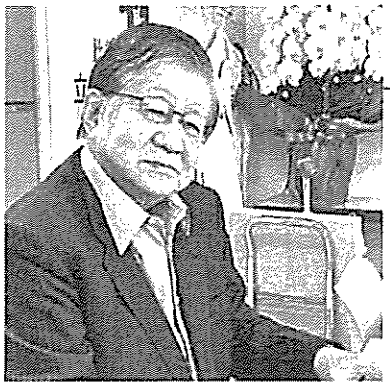

元北海道知事、元衆議院議長
横路　孝弘さん

――札幌で生まれ、大通小学校、二条小学校、啓明中学校と少年時代を札幌で過ごされています。子ども時代に見た映画で印象に残っている作品は？

小学校の行事で見に行った、グレゴリー・ペック主演の「仔鹿物語」(1946年)を覚えています。開拓地の少年が子ジカを飼いますが、作物を食い荒らされてしまう。一家は生きるためにやむなく子ジカを撃ちますが、自分も子どもだったので、生きるための選択やその悩みを理解するよりも「かわいそう」という気持ちが先でした。先生もそうした点を議論させることもなかったと思います。当時の映画館では、上映前にニュース映画を流していました。朝鮮戦争のころで、テレビもないので戦争の映像が記憶に残っています。「あれは何だったのか」と家で新聞を読むようになり、新聞を丹念に読むトレーニングにもなりました。

――衆議院議員、知事時代は？

札幌では、暮れになると「男はつらいよ」シリーズを狸小路の松竹の映画館に見に行きました。家にいると「年越しの準備の邪魔だから」と女房に言われるので、小学生だった子どもたちを連れていきました。映画を見てラーメンを食べて帰ります。山田洋次監督には「幸福の黄色いハンカチ」「遙かなる山の呼び声」と、北海道で撮影した作品がたくさんあります。知事時代、「いつでも映画の舞台にお使いください」と手紙を出したら、お礼状が届きました。今も大切に持っていますよ。

――好きな映画を教えてください。

いろいろありますが、「素晴らしき哉、人生！」(1946年)もその一本です。衆議院副議長になったら、SPと呼ばれる警護の私服警察官が付きました。ある時SPさんが「知り合いが、自分はだめだと落ち込んでいます。どうしたらいいでしょうか」と言うので、この映画を勧めました。その人は、これを見て元気が出たそうです。「自分はだめな人間だ」と思ってしまう人を、決してそんなことはない、あなたもたくさんの人のためになっているし、助けてくれる人がいますよ、と勇気づけてくれます。「最高の人生の見つけ方」もよかったし、黒木和雄監督の「TOMORROW 明日」はじめ戦争レクイエム３部作も見てますよ。富良野在住の倉本聰さんも好きな脚本家です。

勇気くれる「素晴らしき哉、人生！」

――政治と映画には密接な関係があると思いますが、いかがでしょうか？

少数民族や内戦、難民の問題など世界が抱える課題は、日本にいるとなかなかわかりませんが、映画で知ることができます。最近で言えば「ペンタゴン・ペーパーズ　最高機密文書」のような映画を見て、マスコミと権力の関係を通して報道の自由を考えるとか、ナチスによるホロコーストを題材にした映画で、ヒトラーの時代の政治はどうだったのかを学ぶこともできます。それらの中でも「ソフィーの選択」や「ハンナ・アーレント」は、政治家ならぜひ見るべき映画です。逆に日本では戦争中の加害行為や、多くの犠牲者を出した無謀な作戦が映画になることはあまりありません。日本人が戦争の総括をしていないからでしょう。また、南アフリカでのラグビーW杯で国民の融和を呼びかけたマンデラ大統領を描いた「インビクタス　負けざる者たち」で、大統領は自国チームの選手全員の名前を覚えて激励に臨みます。政治家として大事なことだと教えられました。

――北の映像ミュージアムでは９月28日に、千歳ロケ作品「コタンの口笛」の上映会を開きます。アイヌ民族への思いを聞かせてください。

国会議員になって貝沢正さん、萱野茂さん、結城庄司さんらから、さまざまな歴史の話を聞き、先住民族として認めてほしいというアイヌの人々の思いに触れました。知事になってからは「ウタリ問題懇話会」を設置して、アイヌ新法制定などの提言をまとめてもらいました。政府への働きかけでアイヌ文化振興法が施行され、国会では「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議」が可決されましたが、やるべきことはまだたくさんあります。「コタンの口笛」に関して言うと、舞台の千歳市蘭越は、旧北海道１区選出だったうちの親父（横路節雄氏）の働きで電気が引かれた土地というご縁もあるんですよ。

〈プロフィール〉
よこみち・たかひろ
1941年、札幌市生まれ。札幌西高から東京・九段高を経て東大法学部卒。69年に衆議院議員初当選。83年から北海道知事を３期務め、国政復帰後、2005年に衆議院副議長、政権交代の09年に議長。通算12期務め、17年に引退。